

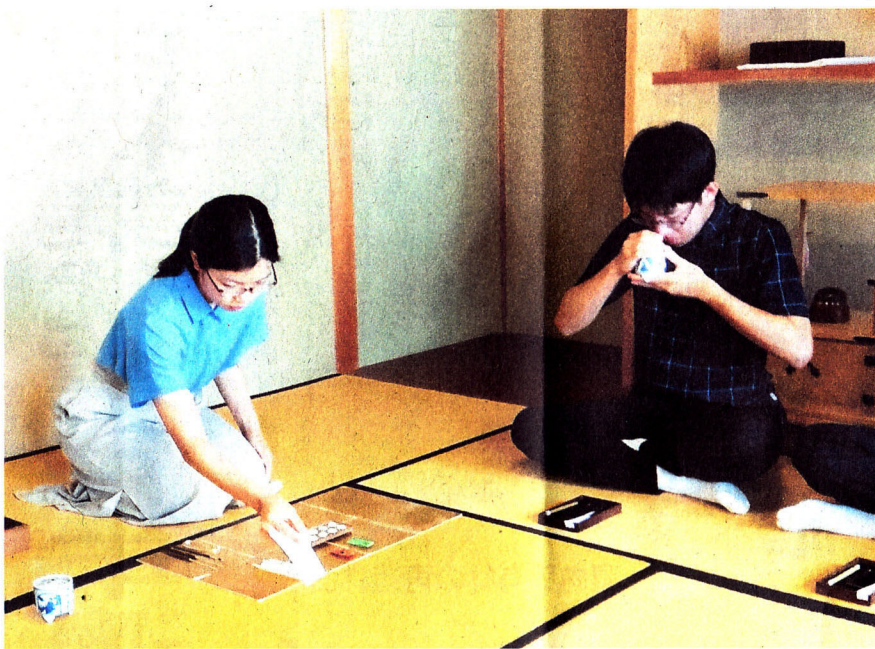
高校生

20年余の伝統引き継ぐ松本深志高香道部

心静かに
香りを聞く

全国でも存在がユニークな松本深志高校の香道部が20年余の伝統を引き継ぎ、稽古を重ねている。10人余りの部員が月2回、日曜日に松本市里山辺の香道師範、矢上千佳子さん(82)の自宅に通い、香道の作法を学ぶ。茶道や華道と並ぶ日本の三大芸道の一つ香道に触れながら、心を落ち着かせて「香りを聞く」香道の魅力を感じている。

日曜日師範自宅で稽古



矢上さん宅の和室で7月下旬、3年生にとっては最後になる稽古があり、香りを判別する「組香」に臨んだ。この日は組香のうち3種類の香りを聞き分ける「異三徳香」全体を仕切る「香元」は部長で3年の水田佑希さん(18)、組香の結果を記録する「筆者」は同じく3年の丹羽桜さん(17)が担った。

厳かな雰囲気の中、水田さんが湯飲み茶碗ほどの大きさの「香炉」で香りの元となる香木をたき、座って待つ部員に回した。香炉を受け取った部員は両手で鼻に近づけ、香りを聞き分けた。矢上さんが時には厳しく、姿勢や道具の使い方を指導。部員は3種類の香りを聞き終えると、配られた紙に答えを書き、最後に答え合わせをした。当たる部員も外れる部員もいた。

部員たちはそれぞれの楽しみを見いだしている。2年の工藤真維さん(16)は「日常生活では落ち着いて『香りを聞く』ということはない。非日常の経験が貴重」。1年の永田惟純さん(16)は香道をたしなむ家族がいることから入部したとし「これまで知らなかった香りを聞くことができるのが楽しい」と話す。

香元を務める水田さん(左)と香炉を手に香りを聞く今井さん

香道部の始まりは2002年にさかのぼる。矢上さんが当時の松本深志高の教員を教えていた縁で高校とのつながりができた。14年に発行された「創部10周年記念同窓会報」によると、松本深志高の「図書館ゼミ」で香道が取り上げられたことをきっかけに10人余りが集まり、愛好会として

活動がスタート。その後、同好会を経て部に昇格した。以来、部員が途切れることなく現在まで続いている。ともに香道部を引退する水田さんは「日曜日の稽古は大変だけど、充実した休日を送れる」、丹羽さんは「日々の稽古をしていないと香道は楽しめない。稽古を大切に」と

後輩を励ます。2年の新部長今井岳人さん(17)は「先輩たちが香道部の歴史を紡いできたので、部員を増やし、ずっと香道を楽しめるようにしたい」と話す。

長年、香道部を指導してきた矢上さんは「稽古を通して自分には何が足りないか気付くことができる。日本の芸道を継承し、自分を磨く手立てにしてほしい」と若い世代に期待している。

似た匂い・色に例えて・直感…
部員たち 独自の聞き分け方

3年生の引退を控えた稽古。静けさの中で集中して行われた

香道で使われる香りの基となる香木は、主に樹木から採集される香料。松本深志高校香道部の部員はどのように判別しているのだろうか。尋ねてみると、それぞれ独自の聞き分け方があった。

で判別している。バタークッキー、歯磨き粉…。「骨董品店のような匂い」を感じることもあるという。

香りを色に置き換えて判断しているというのは3年の水田佑希さん。ある香りは「かすんだ赤」、別の香りは「シナモンに似ている」として「ピン

クと緑」といった具合に色と結びつけるという。

2年の大藤花音さん(16)は「苦み」を一つの基準にしているという。「深みはあるけれど、苦くはない」などと聞き分けている。

この日の「異三徳香」で好成績だった2年の工藤真維さんは「勘に近い。変に推理しない」と説明。「毎回、気持ちを切り替えて新しい香りを聞いている」と話す。

香道師範の矢上千佳子さんによると、「六国五味」という考え方を基に香木の香りを分類する。「六国」は香木の種類による違いで、「五味」は五つの味覚(甘い、苦い、辛い、酸っぱい、塩辛い)に香りを例えている。

「長く稽古をしても正解するとは限らないし、隣同士でも全く違う答えになる。聞くことに関しては経験は関係ない」と矢上さん。香道は奥が深く、香りを聞き分けるのは簡単ではなさそうだ。